

論文

through の空間的メタファーに内在するエネルギー

池上 彰

〔抄録〕

一般的に、英語教育で行われている単語の学習方法は単語帳等を用いた暗記型である。前置詞の学習も例外ではなく、学習参考書などでは簡単な意味の説明や例文のみが掲載されている。本稿の目的は、through の明らかにされていなかった解釈の仕方を取りあげ、より理解を深めていくことである。方法として、2点の先行研究 Hilferty (1999) と Tyler and Evans (2003) を批判した後、the British National Corpus (以下 BNC) などのコーパスから go through を中心にデータを収集し、空間的メタファーに該当するものを分析した。その結果、移動主体が空間を「通り抜ける」際には「力」が働き、メタファーとしても苦労や努力といった要素を含むエネルギーを伴うことが明らかになった。そのため学習や理解の際、単に「通り抜ける」と意味を捉えることを回避できるものと思われる。

キーワード：英語学習、メタファー、空間的メタファー、通り抜ける、エネルギー

はじめに

一般的に、through のイメージは「～を通り抜けて」である。そして、意味拡張された先には空間的メタファーが存在する。中心義においては、トラジェクター（以下 TR）がランドマーク（以下 LM）である空間を一直線に、空間的メタファーでは強い信念とエネルギーを伴って通り抜ける⁽¹⁾。その裏には「時間」、「距離」、「苦労」、「努力」が重なりあう。ここでの空間とは、高さ（縦）・幅（横）・距離（奥行き）を持つ3次元空間のことを指す。本稿では、空間的メタファーの TR が持つエネルギーの存在について論じていく。

1. through の辞書的な意味

ここでは、言葉の意味を深く理解するために必要なことについて考えたい。

英和辞典で through をひいてみると、「(空間を) 通り抜けて」が1番目に記されている。これは中心義に該当するもので、前置詞に限らず辞書の中で意味の表記は多義的である。句動詞の go through の意味は「(～まで) 通り抜ける」、「経験する」などとあるが、その時に TR が持つエネルギーに関する記述がされていないのが一般的である。エネルギーといえば、ある何かによって行動時における身体的・精神的に発生される力のことであり、through のようなある一定の時間的・空間的な長さを持つ3次元空間を通り抜ける際にも発揮される。言葉を活用するためには、辞書的な意味の羅列にとどまって納得するだけでは不十分であり、本当の意味の理解にはほど遠い。through に限ったことではないが、最終的に重要になってくるのはただ単に表面的な意味をとらえるだけでなく、内在する深い意味を認知し、理解へとつなげていくことである。それができないと、ただ単に暗記を繰り返すという学習方法に終始してしまう。次の例文は、辞書に記されているものである。

(1) We all go *through* some sad times. (我々はみな悲しい時を経験する)

(南出 2014: 915)

これは空間的メタファーを表すものである。辞書は意味そのものを調べることは可能であるが、中心義から意味拡張されているという事実に触れず、言葉を深く理解することはできない。言葉を知る上でそれは大きな問題点といえる。(2) は学習参考書にあがっているものである。

(2) He got *through* the difficult exam successfully. (彼はその難しい試験をうまくやり遂げた)

▶ 「通り抜けた」から「(活動が) 終わった」「うまく終えた」

(大西・マクベイ 2017: 464)

これも空間的メタファーを表すものである。▶表記の部分で簡素に解説がされているものの、中心義から空間的メタファーに至るまでの部分で意味拡張についての記述がない。また、「うまく終えた」の中に、「彼」の努力などといった要素が全く解説されていない。このような辞書あるいは学習参考書における意味の認識では深い理解への到達は程遠い。

以上、一般的に認識されるプロトタイプ的な意味の理解とその解説のみでは、言葉の深層的理解はほぼ不可能である。

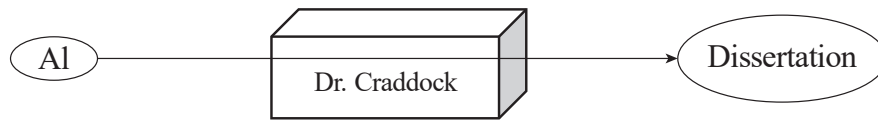
2. 先行研究とその問題点

ここで、through の空間的メタファーに関連する、2点の先行研究を選んで、批判的に検討してみたい。

2.1. Hilferty (1999)

Hilferty (1999) は、メタファーとしての *through* については、MEDIATORS ARE PATH として例をあげている。

(3) Unfortunately, to order the dissertation, Al would have to go *through* Professor Craddock. (あいにく、学位論文を注文して手に入れるために、アルはクラドック教授に頼んでみる必要があるだろう) (Hilferty 1999: 352)



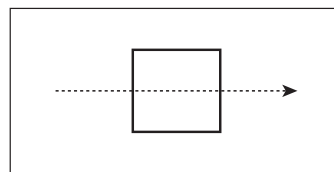
(Hilferty 1999: 353)

図1 MEANS for Al to get a dissertation

この例文は、アルが論文を注文して手に入れるという最終目標に到達するには、MEDIATOR としてクラドック教授に頼まなければならないといった内容のものである。しかし、移動主体にあたるアルが MEDIATOR (仲介者) である教授の許可を得る際に必要とされるエネルギーについての記述がされていない。ここでも、空間的メタファーの深い意味の理解には程遠い。

2.2. Tyler and Evans (2003)

Tyler and Evans (2003) は、空間関係の *through* について proto-scene for “through” をベースに extended action sense まで意味の拡張を論じている。



(Tyler and Evans 2003: 219)

図2 proto-scene for through

(4a) The sunlight shone *through* the glass door. (太陽の光はそのガラスドアから差し込んできた) (Tyler and Evans 2003: 219)

(4b) Mary worked *through* the pages of math exercises. (メアリーは数学の問題を何ページも休まずに解いていった) (ibid.)

これら2つの例文は proto-scene としてあげられているものの、空間的メタファーのエネルギーに関する記述が全くされていない。(4a) は中心義にあたるものであり、ガラスのドアは太陽の光が通り抜けるものとして表現している。(4b) は、メアリーが数学の問題を休むことなく頑張って解いていったという空間的メタファーであることにも触れていない。

以上、2点の先行研究においても、空間的メタファーに内在する移動主体としての(3)のアル、(4b)のメアリーそれぞれのエネルギーについての言及がなく、語の意義を深く理解するには程遠いと判断する。

3. through の中心義と空間的メタファー

この節では、through の中心義との関連から具体的に through の空間的メタファーに内在する移動主体の信念とエネルギーの存在を明らかにしていきたい。

3.1. through の中心的な意味

ここでは through の中心義において、TR が通り抜ける LM にはどのようなものが該当するのかを検討する。

(5a) The bus (TR) went *through* the tunnel (LM). (そのバスはトンネルを通過した) (Hilferty 1999: 349)

(5b) (=4a) The sunlight (TR) shone *through* the glass door (LM). (太陽の光はそのガラスドアから差し込んできた) (Tyler and Evans 2003: 219)

トンネルのような長く広い空間もあれば、山などの形状が一律でないもの、ドアのように奥行きが極端に狭いものや、ガラスドアのような平面的なものも3次元空間に含まれる。(5a)と(5b)は、TRが対象となる空間の一方から入って一直線に通り抜ける。いずれの場合も、3次元空間は移動の経路(PATH)にあるとみなされ、入口と出口が存在する境界である。throughの中心義「～を通過して」は意味拡張の出発点となることは前述しており、またTRの経路におけるLMの通過を表している。次表はBNCでNN.* (普通名詞)とのコロケーション検索をし、+2語(形容詞あるいは冠詞)から引用したデータである。

表1 through が共起する NN.*

共起する名詞	文例数
door	547
window	472
air	287
use	245
trees	229

(BNC)

文例数が最も多いのは door であった。すべて普通名詞であり door, window, trees に加えて air, use, night, eyes といった名詞も 3次元空間として扱うことが可能であるということだ。しかし、中心義と共起する名詞で圧倒的に多いのは door や window のような形のはっきりした空間である。

3.2. 空間的メタファー

ここで本稿のタイトルにもなっている空間的メタファーについて空間、言葉、そして時間の視点からその中身について考察したい。

3.2.1. 空間と言葉

我々は空間の中で生活している。自分の部屋に代表される一人で作る空間もあれば、駅や職場、学校などのように大勢の人が作るのも空間である。「空間を作る」とは、人為的に多くのものが並べられた場所をイメージしがちであるが、人間の心理が働いてできるのも空間である。(6) の例文でそのことを検討する。

(6) I don't know how people (TR) are going to get *through* the winter (LM). (私は人々が、どのようにして冬を乗り切るのが分からない) (BNC)

この例文は、LM の the winter が人の目によって3次元空間として見立てられている。ここでは、get through を「乗り切る」としているが、元々はトンネルに代表されるような3次元空間が視覚認知という経験基盤によりメタファーとなり、言葉として表現されている。また、寒くつらい冬は苦勞して耐えながら乗り切っていくという心理的な要素が働いている。

3.2.2. 時間の空間化

TR が3次元空間を通り抜ける際には時間とも関係が深い。

- (7) (= (5a)) The bus (TR) went through the tunnel (LM). (そのバスはトンネルを
通っていった。 (Hilferty 1999: 349)

人が事象を認知する際、多くの場合は視覚的にとらえる。この例文では、トンネルとバスの存在が認知され、TR のバスが LM のトンネルという 3 次元空間を一直線に駆け抜けるのであるが、その経路には時間の存在も絡む。ここでは、バスの経路において時間が空間化されて文章表現となっている。空間的メタファーにも同様に時間の空間化が伺える。(8) でそれを検討したい。

- (8) (= (6)) I don't know how people (TR) are going to get through the winter (LM).
(私は人々が、どのようにして冬を乗り切るのが分からない) (BNC)

この例文の中に存在するのは、私、人々、そして冬である。それらが視覚認知によって時間的併存状態にあったのを、空間的な継起状態に移行されている。しかも、TR が LM に該当する 3 次元空間を「乗り切る」と表現されている。このように、時間が伴う事象に関しては人間の目で空間化されていき、それが文章化され事の次第ではメタファーとなる。

3.2.3. 話し言葉と空間的メタファー

言葉を伝達する際には、大きく分けて書き言葉と話し言葉が使われる。through に限らず、一般的に書き言葉は、物事を文字で伝える役目を果たす。しかしこれは、一方的な情報提供にとどまることが多い。読み手の層を選ぶことなく、誤解を招きにくいという利点がある反面、表現の豊かさに欠け、比較的難しく理解に時間がかかるという欠点がある。次の文を見よう。これは書き言葉の例である。

- (9) We finally managed to convince her that she had to discontinue her practice of depending upon men for her sustenance. (私たちは一生懸命に彼女を説得して男性に頼った暮らしを止めるべきだということを知ってもらった)
(ピーターセン 2011: 95)

それに対して、口語的とされる話し言葉を表す次の文はどうだろうか。その利点は直感的に理解しやすく、文章に躍動感、つまりエネルギーを感じさせる文が生まれる。また、人の目にもとまりやすい。反面、欠点は文法的な間違いが生じやすく、省略語があるため誤解を招きやすい。

- (10) We finally got *through* to her that she had to stop living off men. (私たちは、彼

女が男性に頼った生活を止めるべきだということをなんとか伝えた) (ibid.)

(9)と(10)は意味こそほぼ同じであるが、文の持つフィーリングが違っている。(9)は仕事上の報告書などで使う堅い印象の文といった感じを受ける。それに対して、(10)は友人へのメールや手紙、あるいは日常の会話で使われ、柔らかさが感じられる。当然ながら、書き言葉には人の心情や情緒を転写することができない。したがって through の空間的メタファーで代替することで、口語的な柔らかい表現になり、文章に人間味が生まれるのだ。また、文章を短くできるという利点もある。through には「何とかして(時間をかけ苦勞をしながら)その空間を切り抜ける」といった比喩的な意味合いも存在する。ここでは、(10)がそれに該当し、空間的メタファーとなっている。

それでは、なぜ動詞に副詞や前置詞を加えた句動詞を使うと柔らかく人間味のある表現になるのだろうか。人は言葉を発する際に、視覚的に捉えたことを頭脳が命令し、表現に変える。言葉に心を込めるとするのは、感情がその中に織り込まれるということの意味する。すなわち、心情が込められるからである。

3.2.4. 空間的メタファーに生じる TR のエネルギー

ここで、基本動詞のいくつかを through が共起する頻度数をもとに、空間的メタファーを含む例文を挙げてその意味の解釈をする。次表は、BNC を使って through が共起する動詞の文例数をあげたものである。共起語の品詞は一般動詞の定形の基形 (VVB) で、中心語 (through) の前後はそれぞれ3語の範囲となっている。

表2 through が共起する動詞

共起する動詞	文例数
go	665
pass	145
come	140
get	113
walk	59
look	56
move	43

(BNC)

go through の文例が 665 で圧倒的に多いことがこの表から判断できる。それは、go が他の run, walk, pass, come, get を代用している可能性が高いことを意味する。go, come, get, run といった動詞はある一点から別の一点へと進む動詞である。ということは、空間を通り抜ける際

には何らかの力が加わるため、エネルギーの存在が明らかになる。これらは through と共起し、時間と空間を伴いながらある一定の経路を通る。中心義における「通り抜ける」は、一般的に視覚的に認知される。一方、空間的メタファーのそれは心で捉えられる。目で見えた事象は、脳で捉え心に映し出されるのだ。

ここで、through の空間的メタファーの例文をあげて TR に内在するエネルギーの要素（手間・試練・努力・集中力・苦勞・真面目さ・到達）について検討したい。次の文では、LM を通り抜ける TR の行動には「手間」が存在している。

- (11) [手間] So, I asked if I (TR) might go *through* it (LM) again and try some of the ideas he talked about. (そこで私はもう一度その手順を踏み、彼が話してくれたアイデアのいくつかを試行しても良いかを尋ねた) (BNC)

手順を踏むというのは、中心義から意味拡張されたメタファーであり、手間と時間をかけて目的に到達すると考えられる。これもその3次元空間を通り抜けるものであり、時間やある種の苦勞の存在が感じられる。手順を踏む際には、それなりに知恵が必要になるし、一つ一つを丁寧に集中してやりとげる力が要求される。同時に時間も必要になっていく。また、次の例文では TR の「試練」が表現されている。

- (12) [試練] A successful team (TR) may have to go *through* a number of fights (LM) during the course of a day's competition. (成功するチームは、一日の試合の間中、多くの戦いを経験しなければならないのかもしれない) (BNC)

戦いを経験するというのもメタファーとして捉えられ、空間を通り抜けるものであると理解できる。大方の場合、トンネルに代表される3次元空間を通り抜けようと思えば、身をかがめて「くぐり抜ける」といった行動をとらねばならない。これは、辛く長い窮屈な経験に基づいて、心の感覚に訴える空間的メタファーとなっていく。through には TR がある空間をひたすら突き進み、振り返ると目的地に達成していたという意味合いが強い。その TR の信念とひたむきな「努力」が空間的メタファーの中に織りなされている。次の例文でそのことを明らかにしたい。

- (13) [努力] *Through* hard work and sheer determination (LM), Dennis carved out a career in the building industry (TR). (勤勉さと鋭い決断力で、デニス は建築産業において成功を築き上げた) (BNC)

この文のLMである *hard work and sheer determination* は時間的に長い3次元空間である⁽²⁾。そこを通り抜けるには、苦勞と努力が重なり合う。テニスという成功者の心理状態には煩悩がなく且つ、ぶれが生じておらず、強い意志でひたむきに努力を重ねた結果、成功を手にしたと判断できる。空間を一心に通る抜ける為にはざわついた心の存在はあり得ない。別の言い方をすると、勝負事における大記録や様々な分野で偉大な功績を残してきた達人の身体の中には、煩悩と対峙する「静かな一点」が存在する。これは揺るがない信念があるからこそ与えられるものである。苦しみながらも何かを達成するためには必要とされる能力であると判断してよい。(14)の例文はその勝負の世界で、3次元空間におけるTRの「集中力」が表現されている。

- (14) [集中力] Wimbledon champ Roger Federer (TR) breezed *through* his opener (LM) against Albert Costa in straight sets. (ウィンブルドンチャンピオンであるロジャー・フェデラーは初戦の相手アルベルト・コスタをストレートセットで一蹴した) (Word banks Online)

この場合の *breeze through* は「楽勝する」という意味の空間的メタファーにあたる。テニスの試合自体はとてもハードなものだ。TRが試合開始から終了まで、楽勝でありながらも、集中して試合に臨んでいる。ある一定の空間、ここではテニスの試合を表すが、集中して取り組まないと勝利には到達できない。次にあげるのは「苦勞」を表すものである。

- (15) [苦勞] Up to 1000 artists (TR) pass *through* each year. (1000人ものアーティストが毎年合格する) (BNC)

TRが苦勞を重ねて過ごしている時間が3次元空間として捉えられる。アーティストは、オーディションなどに合格するまでに何年もの長い時間を費やすことが多い。競争の意味合いが強いオーディションという3次元空間を戦い抜くためには、やはり苦勞はついて回る。それと重なる部分もあるが、TRの「真面目さ」を感じさせる次の例文を確認してみたい。

- (16) [真面目さ] So I (TR) can run *through* it (LM) before the presentation. (そうすれば、私はプレゼンテーションの前にそれを通し読みできるのです) (BNC)

run through の中心義は、「走り抜ける」である。これが川の場合には、「貫流する」となり、さらにそれは「通し読みする」までに意味拡張されていく。これらの意義の背景にあるのは、TRの動作がある一定方向に向かって直線的に進んでいくことである。*run* という動詞が使わ

れるのは、「速く」物事を進めていくというニュアンスが感じられる。次の「到達」についても TR がエネルギーを持って空間を進んでいると感じられる。

- (17) [到達] He beat fellow American and world No 5 Michael Chang 7-5, 6-2, but had to wait for the result of the final round robin match in his group between big-hitters Goran Ivanisevic and Richard Krajicek to see if he (TR) would get *through* to the semi-finals of this last ranking competition of the year . (彼は対戦相手のアメリカ人で世界ランキング5位のマイケル・チャンを7-5, 6-2で下したのであるが、その年のランキング最終決定戦の準決勝にまで到達できるかどうかを確かめるために、自分のグループの総当たり戦のビッグヒッター同士の最終試合ゴラン・イヴァニセビッチとリチャード・クライチェクの一戦の結果を待たねばならなかった) (BNC)

テニスに限らずスポーツの大会で準決勝までたどり着くためには、相当な精神力と忍耐力が必要とされる。例文の書き手は through を使うことによって、TR が直面した精神面の辛さと信念の内在を表現している。ここでの3次元空間は、ランキング最終決定戦の準決勝にまで到達できるかどうかまでの道のりであり、平たんではない。

3.2.5. 3次元空間の名詞

中心義の go through の LM は形が明確な木、森、ドアなどであった。一方、through の空間的メタファーを考察する際には、LM に経験、戦い、オーディションといった形の不明確な名詞が使われていることが多い。ここでも、go through の例を取り上げてみる。

- (18a) (= (1)) We (TR) all go *through* some sad times (LM). (我々はみな悲しい時を経験する) (南出 2014: 915)
- (18b) (= (12)) A successful team (TR) may have to go *through* a number of fights (LM) during the course of a day's competition. (成功するチームは一日の試合の中で、多くの戦いを経験しなければならないのかもしれない) (BNC)
- (18c) Love is like the measles; we (TR) all have to go *through* it (LM). (恋ははしかのようなものだ。誰でも一度はかかる) (英辞郎 On the WEB 2020: ver.162)
- (18d) He (TR) went *through* a terrible time (LM) after he lost his job. (職を失ってか

ら、彼はひどくつらい日々を送りました) (ibid.)

(18a) と (18d) の「時」と (18b) の「戦い」、(18c) の「はしか」の形は不明確であり、抽象名詞でもある。この場合、TR が LM を通り抜けて、中心義の「通り抜ける」が「経験する」、「かかる」あるいは「送る」といった意味へと拡張されている。BNC で go through を検索してみたところ、その LM には他にも次表のような類例が見られた。

表3 空間的メタファーの through に共起する名詞

共起する名詞	文例数
life	32
a period	12
the process	10
the pain	7
a series	7

(BNC)

この表では「人生」が最も多く、32 文例があがった。そのほかにも「時代」、「過程」、「痛み」、「一続き」といった、ここでも曖昧な形をしたものが多い。

以上、この節では空間的メタファーにおいては、時間・苦労などといった意味合いを持つ LM、すなわち 3 次元空間を通り抜けるために、TR はエネルギーを持つことを論じてきた。その LM に当たる名詞はいずれも抽象名詞であり、TR はその LM を通り抜けてメタファーとなる。

4. 英語学習と句動詞

ここでは句動詞の効率的な学習方法について考えたい。

go の根幹の意味は「行く」である。つまり、動作を表す。それは、時間的・空間的双方に作用する。テイラー (2017: 112-113) によれば、「句動詞は結局 1 つ 1 つ覚えていくしかないのである」とある⁽³⁾。句動詞は英語基本動詞の根幹の意味をつかむための格好の練習相手となる。一般的に句動詞 (phrasal verb) といえば、動詞に副詞や前置詞が共起し、「1 つのまとまり」で動詞の働きをするもので、学習者にとっては過酷な暗記対象となっている。確かに暗記学習も時間的制約の中では有効な方法かもしれない。しかし、シンプルな動詞と前置詞の根本的な意味を探り活用すれば、句動詞も習得しやすくなる。ここで例をいくつか挙げてみよう。基本動詞と through の意味を掴んで、中心義と空間的メタファーまでたどり着ければ意味拡張の過程も把握しやすい。次の表でその一部について考えてみよう。中心義と空間的メタフ

アーの間には、移動主体が空間を（頑張って）「通り抜ける」という要素を絡めていく。

表 4 through を伴う句動詞の意味拡張

英語基本動詞	副詞	中心義	空間的メタファー
go（行く）	through（通り抜けて）	（空間を）通り抜けていく	（苦しさなどを）経験する
pass（過ぎる）	through（通り抜けて）	（空間を）通り過ぎる	（辛いことに耐えて）経験する
come（来る）	through（通り抜けて）	（空間を）通り抜けて来る	（困難・苦境を）切り抜ける

この表は、基本動詞の go, pass, come のそれぞれの意味に through の意味を加えただけのものであるが、意味の解釈はしやすくなる。ただひたすらに暗記学習を繰り返すのは、非効率であり、生産的な学習方法とは言えない。効率的・生産的な学習方法とは、語の根幹の意味を理解し、比喩的なイメージをしながら進めて行くことではないだろうか。人間が身体で直接経験したことは、想像しやすいはずである。

この節では、句動詞の学習方法を意味拡張の視点から、工夫して学習を重ねることがより一層の効果が期待できると述べてきた。

結 論

全体を通して、through の中心義と空間的メタファーを含んだ例文をコーパスなどで検証し、TR が 3 次元空間を通り抜ける際にはエネルギーが伴うことについて明らかにしてきた。その結果、辞書的な意味をただ調べるだけでなく、その言葉の中心義から意味拡張されていることを把握し、根元に存在するものを明らかにすれば、理解もより一層深まると考えられる。空間的メタファーの through の場合、3 次元空間を通り抜けるためには TR に時間的・労苦的な要素が絡んでいる。また、3 次元空間にあたる LM は、輪郭のはっきりしていないものが多く、視覚的には捉えにくい。TR はその LM を通り抜けて、意味は比喩的に展開する。through には今後も様々な変化が予想されるため、継続的な研究は必至である。

〔注〕

- (1) Langacker (2008) では、焦点をあてていく部分についてはトラジェクター (TR)、またその TR の位置の基準点として捉えるものをランドマーク (LM) とされる。本稿では、主に文の移動主体に当たるものを TR、通り抜ける 3 次元空間を LM とした。
- (2) 宮崎 (2009) において、「原因を表す LM を媒介にして、文の中で through が使われる前に生起するイベント (事象) 全体が結果を表す TR として生じている」とある。(13) の文例では勤勉さと鋭い決断力 (LM) によって、デニスが建築産業において成功を築き上げた結果 (TR) が表されている。
- (3) 一つ一つ覚えていくのは間違いではないが、英語基本動詞や前置詞・副詞の言葉の根幹に触れなが

ら学ぶ方が、最終的には理解が深まっていくと考える。

〔参考文献〕

- Hilferty, J. 1999 Through as a means to metaphor. In L. de Stadler and C. Enrich, eds., *Issues in Cognitive Linguistics*, pp. 347-365. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 小林修一 2006 「日本語の『場所』性をめぐって：認知言語学と言語の身体性に関する論議から」『東洋大学社会学部紀要』44, pp.5-22, 東洋大学学術情報リポジトリ.
- Lakoff, G. and M. Johnson. 1980 *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, W.R. 2008 *Cognitive Grammar A BASIC INTRODUCTION*. New York: Oxford University Press.
- 南出康世 2015 『ジーニアス英和辞典』（第5版第2刷）東京：大修館書店.
- 宮崎順子 2009 「前置詞 through について」『英語圏研究』5, pp. 47-57, お茶の水女子大学大学院英文学会.
- ピーターセン、M. 2011 『続日本人の英語』東京：岩波書店.
- 瀬戸賢一 1995 『メタファー思考』東京：講談社現代新書.
- 瀬戸賢一 1995 『空間のレトリック』東京：海鳴社.
- 瀬戸賢一 2007 『英語多義ネットワーク辞典』東京：小学館.
- 瀬戸賢一・投野由紀夫 2012 『プログレッシブ英和中辞典』（第5版第1刷）東京：小学館.
- 瀬戸賢一 2014 「語の多義性から見た文法構造（特別寄稿論文、関西英文学研究）」『英文学研究 支部総合号』6, pp.339-346, 日本英文学会.
- 瀬戸賢一・山添秀剛・小田希望 2017 『認知言語学演習2 解いて学ぶ認知意味論』東京：大修館書店.
- 瀬戸賢一 2017 『よくわかるメタファー』東京：ちくま学芸文庫.
- 田中茂範 2015 『表現英文法』（第2版）東京：コスモピア
- 谷村緑・仲本庸一郎 2007 「メタファーで学ぶ発想の違い——認知言語学の観点から」『大学英語教育学会紀要』45, pp.95-107, 大学英語教育学会.
- テイラー、ジョン・R. (西村義樹 他訳) 2017 『メンタル・コーパス』東京：くろしお出版.
- the British National Corpus <https://scnweb.japanknowledge.com/BNC2/> (Retrieved on August 20, 2020)
- Tyler, A. and V. Evans. 2003 *The Semantics of English Prepositions: Spatial scenes, embodied meaning and cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 綿貫要・ピーターセン、M. 2006 『表現のための実践ロイヤル英文法』東京：旺文社.
- WordbanksOnline <https://scnweb.japanknowledge.com/WBO2/> (Retrieved on August 20, 2020)

〔引用文献〕

- 英辞郎 on the WEB <https://eow.alc.co.jp/search?q=go+through/> (Retrieved on September 15, 2020)
- Hilferty, J.1999 Through as a means to metaphor. In L. de Stadler and C. Enrich, eds., *Issues in Cognitive Linguistics*, pp.347-365. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 南出康世 2015 『ジーニアス英和辞典』（第5版第2刷）東京：大修館書店.
- 宮崎順子 2009 「前置詞 through について」『英語圏研究』5, pp.47-57, お茶の水女子大学大学院英文学会.
- 大西泰斗・マクベイ、P. 2017 『総合英語 FACTBOOK これからの英文法』東京：桐原書店
- テイラー、ジョン・R. (西村義樹 他訳) 2017 『メンタル・コーパス』東京：くろしお出版.
- the British National Corpus <https://scnweb.japanknowledge.com/BNC2/> (Retrieved on Aug 20, 2020)
- Tyler, A. and V. Evans. 2003 *The Semantics of English Prepositions: Spatial scenes, embodied meaning and cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Word banks Online <https://scnweb.japanknowledge.com/WBO2/> (Retrieved on Aug 20, 2020)

through の空間的メタファーに内在するエネルギー (池上彰)

(いけがみ あきら 文学研究科文学専攻修士課程／修了)
(指導教員：瀬戸 賢一 教授)
2020 年 9 月 28 日受理